

社会の大人も、生徒も、対等に繋げる。 繋がりが生徒たちの思考を自由にさせる

出水商業高校（鹿児島県・出水市立） 山下優香先生

キャリアコンサルタントの 資格取得で広がった視野

「生徒は仲間」と語る山下優香先生。その思いに至ったのは、正規教員として初めて赴任した農業高校でのこと。先輩教員たちからはいつも怒られ、ある生徒とは校則についてぶつかり、何もかもがうまくいかなかった。でも自分に元気がないと、代わりに授業を進めてくれる生徒がいたり、担任のクラスの生徒たちが守ってくれることが多々あった。

「自分にできるのは、仲間であって、くれる生徒たちに寄り添うことだと思っただけです」

例えば、進路選択では生徒の夢は最後まで応援しようと思った。他の先生は無理だろうと言う夢でも、本人と何度も語り合い、本音を引き出し、生徒自身がやるだけやっただと思えるところまで挑戦を応援する。その結果、たとえば希望の進路

は叶わなくても、本人は納得して別の道を進むことができる。

「教員の仕事は生徒の夢を諦めさせることではなく、夢に向かって最善を尽くす後押しをすることだと確信しました」

しかし、次の赴任先の工業高校で山下先生は担任を希望するが「無理だ」と言われてしまう。多くの生徒が進路で就職を選択する工業高校において、就職先の企業についての知識や繋がりが教員は、担任をもちにくかったのだ。

「寄り添いは土台。もっと専門的に生徒の人生を応援できる力をつけたい。そのときに知ったのがキャリアコンサルタントという資格でした」

資格取得のために半年間通った講習の場で、企業の人事担当者、ハローワークに勤める人、コンビニの店長など、さまざまな職種の人々との出会いがあった。それまでネガティブに受け止めていた転職も、海外で

はキャリアアップに繋がることや、自分が万能でなくても足りない部分は人の力を借りればよいことなど、一気に視野が広がっていった。

「自分が知らない職種を生徒が希望すると、つい『大変だよ』と言ってしまいがちですが、その職種の人を知っていたり知識があれば、生徒に現場の声を提供できます。また、生徒たちに『何かあったら会社を辞めてもいいんだよ』と言えるようになりました。高卒で入った会社が一生の仕事になるかはわからない時代。それもキャリアコンサルタントの仲間を通して知り得たことです。私自身が多様な人と出会う機会の大切さを実感できた経験でした」

それからの山下先生は、学校外の人々との繋がりをづくり、それを生徒たちに繋げる取組を次々と実践していく。例えば、出水市主催のリノベーションスクールの通知があった。市内の空き店舗などの遊休不動産

生徒の機会と選択のために / 大切にしている3箇条

1 生徒も保護者もみんな仲間。 一緒に考えて支え合う

生徒、保護者、まちの人、管理職など、誰とでも上下関係ではなく対等な立場で考えて支え合うほうがずっと納得解が得られやすいと知った。

2 多様な人と繋がることで生徒が 「本音やワクワク」を見つけられる

自分自身が校外の講習などでのさまざまな出会いで一気に視野が広がり、それを生徒にも経験してほしいと、多様な人と生徒を繋げている。

3 価値は時代によって変化する。 考えは変わってもいい

今の正しさが将来も正しいとは限らない。考えは変わってもいいし、就職後に何かあったら辞めてもいいと生徒に言えるようになった。



山下先生の「現在地」 /

学校の外で有志が参加する
部活外活動「SAN楽LABO」

学

学校の近隣にある企業と連携して、放課後に自由に生徒が集まって地域の大人と交流する場「SAN楽LABO」。きっかけは、「小学校時代の学童のように、放課後に気軽に寄れる居場所が欲しい」というある生徒の声。その声に応え、地域の人々と山下先生が連携して2024年6月に発足。メンバー企業が日替わりで場所を提供し高校生たちは自由参加。そこにいる大人と会話したり、大人たちの知見をいかしたワークショップなどのイベントを開催したりしている。出水市の高校生なら誰でも参加できる。取材した当日も、ある生徒が「家に休眠煙があり、祖母がなんとかしたいと言っている」と話すと、山下先生がすかさず「面白そう!何かできないかな?」と声をかけ、さまざまなイベントのアイデアが生徒たちから繰り出されていた。



「SAN楽LABO」ではまちの人、高校生がフラットな関係のなか、対話しながら共にやりたいことの意見を出し合って運営している。

やました・ゆうか ● 鹿児島県奄美大島出身。小中高と先生に恵まれ教員を目指す。特に、生徒一人ひとりの良いところを見つけ、まちの人にも信頼されていた小学校時代の担任がロールモデル。長崎大学卒業後、奄美高校、大島北高校、鹿児島農業高校、出水工業高校を経て2024年より現職。2019年にキャリアコンサルタントの資格取得。

「生徒にも保護者に対してもそれぞれ敬意を払い、一人の人として対等に関わり、共に考えることが、教員にできることだと思います」

を対象にエリア再生のためのビジネスプランを考えるスクールだ。当時、学校の授業が簡単すぎると、いつも寝ていた生徒がいたため、その生徒を誘ってみると興味を示したので二人で参加。ほとんどが社会人で高校生はその生徒だけだったが、とてもいきいきと取り組み、大人の中でも堂々と自分の意見を語っていた。「まちや社会の大人と繋げることで、生徒が自分の本音に気づきワクワクを見つげられるとわかったのです。私自身もスクールで新たな繋がりができ、講師を学校に呼ぶなど、繋がりが繋がりを呼ぶ循環が生まれました。私の出身地の奄美大島のことわざ『水や山うかけ、人や世間うかけ(水は山のおかけ、人は世間のおかけ)』のように、人からして

もらったことは誰かに返し、温かい想いを循環させたいと思っています」
高校時代は選択の練習期間
今この選択が変わってもいい
まちと繋がることで、「高校生と関わりたい」「出水にいる生徒たちを応援したい」というまちの人々の想いを山下先生は肌で感じた。まちの人と生徒を繋ぎ、その想いとその方々の専門性を循環させるために、山下先生が外部の人を学校に呼んでくると、管理職の先生方も喜んで応援してくれた。
招いた講師には全校生徒を対象に講演をしてもらうこともあれば、山下先生の家庭科の授業でワークショップをしてもらうこともある。さらに、地元企業の人々と共に、放

課後に生徒を集めてワークショップを行う部活外活動「SAN楽(がく)LABO」(左のコラム参照)も実施。多様な形式で繋がりを広げている。幅広い活動を通して山下先生が意識しているのは、生徒とは上下関係ではなく対等に接することだ。「生徒は仲間です。今は高校生ですが卒業すればすぐ社会人になる人たち。卒業生になればまた一緒に、次世代の生徒のための取組ができるかもしれない。もともと生徒たちは、私が『教える』ことをしなくても、機会さえ与えれば自分たちでやりたいことに気づき、実現する力をもっているのです」
それでも答えを欲する生徒もいる。そのときは「今価値があると思っている答えが未来には変わっていくよ」と言っています

「変わってもいいと言われても生徒はモヤモヤしています(笑)。でも、変化していく世の中で生徒たちは自分の人生を創っていくかなければなりません。だから、『高校生はたくさんの中から選ぶ練習をしているんだよ』と言っています」

多様な大人と繋がりをもち、自身での気づきを促されると、生徒たちの思考や物事の捉え方が自由になつていくと山下先生は感じている。ただし、生徒自身が自由な思考になり、自分の好きなことを見つけたとしても、進路選択においては保護者の応援が力ギとなる。教員が関われるのはわずか3年間。卒業後も生徒にずっと寄り添い続ける保護者と生徒自身の想いのすり合わせも、山下先生が大切にしていることだ。三者面談は生徒と保護者の想いを重ねられるよう、「保護者の次に、2番目に生徒のことを思っている人でありたい」と伝え、本音を言い合える環境づくりに徹する。最終的には保護者から生徒に「がんばりなさい。これからも応援している」という言葉が出てくるという。

